

「ケンチク」たちは
この街の文化を
今日も語り続ける

人の暮らしや街の歴史
ある時代の思想を乗せる箱舟となり
「現在」に流れ着いたものたちが
街の風景を
街を纏う空気を形づくる

ケンチクの声

「総合芸術」とも称される建築
それは、建物や構造物という
イメージを超えて、

嘆けるか
怒れるか
はた黙せるか
聴け 果てしなき
ケンチクの声

Sasebo Building Cards

佐世保の代表的「ケンチク」が待望のカード化!! サセボケンチクカード Season1

写真提供:(公財)佐世保観光コンベンション協会

黒島天主堂 Kuroshima Church

設計者 マルマン神父(ジョセフ・マルマン)
所在地 黒島町3333
竣工 1902年



黒島に渡った潜伏キリシタンたちの献金・労働奉仕によって完成した天主堂。設計・指導にあたったマルマン神父はそのまま黒島に残りその一生を終えたんだ。

歴史 4 機能美 3 装飾美 4 規模 2 威圧感 6

山暖簾 Yamanoren

設計者 黒川紀章(プロデュース)
所在地 世知原町上野原316
竣工 2004年



建物から眼下に広がる山々の緑が、線上の防火帯に切り取られ暖簾のように見えるのが、その名の由来とも!? 世界的建築家 黒川紀章がプロデュースしているゾ。

歴史 1 機能美 3 装飾美 3 規模 4 マイスイオン 6

佐世保市博物館島瀬美術センター Sasebo City Museum Shimano Art Center

設計者 岡野 真
所在地 島瀬町6-22
竣工 1983年



特徴的な壁面からの突起物には、ギリシャ神話の12神があらわれているが、これは設計者が、佐世保の山並みに這い上る住宅にギリシャを感じたからなんだって!

歴史 2 機能美 3 装飾美 3 規模 3 神様の数 6

針尾送信所 針尾無線塔 Hario Radio Tower

設計者 佐世保鎮守府建築科
所在地 針尾中町382
竣工 1922年



当時の最高技術が注がれた無線送信施設群。鉄筋コンクリートによる高層建築の実験と実践の場は、戦後、地元の子供たちが上った度胸試しの場でもあった(驚)!

歴史 4 機能美 5 装飾美 1 規模 4 威圧感 6

梅ヶ枝酒造 Umegae Sake Brewery

設計者 不明
所在地 城間町317
竣工 1830~1867年



市内では珍しい江戸時代から残る建築であり、現役の造り酒屋。「梅ヶ枝」は、大村藩主が名付けたんだヨ。徒歩圏内の手彫りで掘られた防空壕・無窮洞も必見!

歴史 5 機能美 3 装飾美 3 規模 2 大村藩 6

江迎本陣跡 Former Emukae Honjin

設計者 不明
所在地 江迎町長坂209
竣工 1832年



平戸藩主の参勤交代などで作られた本陣(宿)。お殿様が座ったまま眺めるように作られた庭園は、わざわざ京都から庭師を招いて作らせたんだって!

歴史 5 機能美 3 装飾美 3 規模 2 平戸藩 6

煉瓦倉庫群 Brick Warehouses

設計者 不明
所在地 平瀬町~立神町
竣工 1888~1913年




米海軍基地から立神エリアに位置する赤レンガの倉庫群は、その立地から保存状態が良好で、意外にもその集積度の高さは国内最高レベルとの評価もあるらしい!

歴史 4 機能美 4 装飾美 2 規模 4 レトロ感 6

ジャイアントカンチレバークレーン Giant Cantilever Crane

設計者 サー・ウィリアム・アロル社(イギリス)
所在地 立神町22
竣工 1913年



SSKが誇る巨大クレーン。250トン(アフリカゾウ40-50頭分!)の重さのものを持ち上げられるよ。今も現役で、世界に10台、日本には3台しか残っていないんだ!

歴史 4 機能美 5 装飾美 1 規模 3 パワー 6

西海橋 Saikai Bridge

設計者 吉田 巖
所在地 針尾東町~西海市西彼町小迎
竣工 1955年



うず潮を見下ろす佐世保市と西海市の海峡を結ぶアーチ橋。完成当時は東洋一と評され、昭和31年公開の映画「空の大怪獣ラドン」で破壊されたこともあるよ!

歴史 3 機能美 5 装飾美 1 規模 4 絶叫度 6

毎月、市内文化施設のイベントカレンダーを佐世保市ホームページ、Facebookページ「文化のチカラ」に掲載しています。

ケンチクの声 The Shinwa Bank・Kaishoukan

あの建築が佐世保の生活に根をおろしてしまえば、銀行など何らかの安まるものとなってくれるんじゃないか」という言葉が残されている。

現在も十八親和銀行佐世保本店の窓口として機能する第1期棟は、1955年、白井が誰からも頼まれずに取り組んだ原爆・核を正面から取り上げた美術館構想「原爆堂計画」がその原型となっていることでも知られている。最後の被爆地である長崎からほど近く、また同時に基地と共存し、時に原子力船をも受け入れてきた佐世保、そしてその街のモニュメントを目指した銀行建築に白井がそのモチーフを移植したのは、偶然だろうか。

「軍港」として発展してきた佐世保が、敗戦後、旧海軍施設を活用した「商港」としての再出発を切った頃、来るべき未来への不安と希望が入り交じる中、新たに作られた佐世保市歌は「みどりの山に囲まれて 七つの洋に展げゆく」という出だしからはじまる。霧を懐に抱く館の11階には、佐世保港を一望できる戦艦のブリッジのように傾斜した大型の窓を持つ展望室が設けられた。そこに佇む北村の像は「声」を発することなく、今もその窓を眺めているようにも見えた。

※現在、建物の見学は行っていません



懐霄館 11階 展望室



原爆堂計画より



THE SHINWA BANK

闇の中から海と光を求め続ける銀行

旧親和銀行本店

(十八親和銀行佐世保本店)

一瞥しただけでは、およそ銀行建築とは認識できないケンチク群。アーケードに視界を阻まれてなお、その存在感を隠し切ることは難しい。それぞれが独特の外観を持ち、単純な調和や、浅薄な理解を阻むように建つ3棟の中でも、一際異質に映る石造りの塔に足を踏み入れると、まずその薄暗さに驚く。

本来、コンピュータ棟として計画されたものでありながら、室内に噴水を引き込んだサロン、ロシアイコンのコレクションルームなどを有し、その明暗のコントラストも相まって秘密めいた美術館のような趣きさえ感じさせる。懐霄館と名付けられたこの塔を含む旧親和銀行本店は、計3期、延べ10年を超える歳月をかけて完成した白井晟一の代表作だ。

孤高の建築家とも呼ばれた白井を佐世保に招いたのは、当時の親和銀行頭取であり、文化事業に心血を注いだ北村徳太郎（佐世保市名誉市民）だった。白井に対するオーダーは、「百五十坪ばかりの空地に多少公共的意味を持ったモニュメンタルなものを」というもの。またそのやり取りを推し量る補助線として白井の「街の人びとがすくなく思わないし、すくなく思われてはむしろ困る。だが、10年か20年たつて、

旧親和銀行本店・懐霄館
(十八親和銀行佐世保本店)
The Shinwa Bank・Kaishoukan

設計者 白井晟一

所在地 島瀬町10-12

竣工 1967~1975年

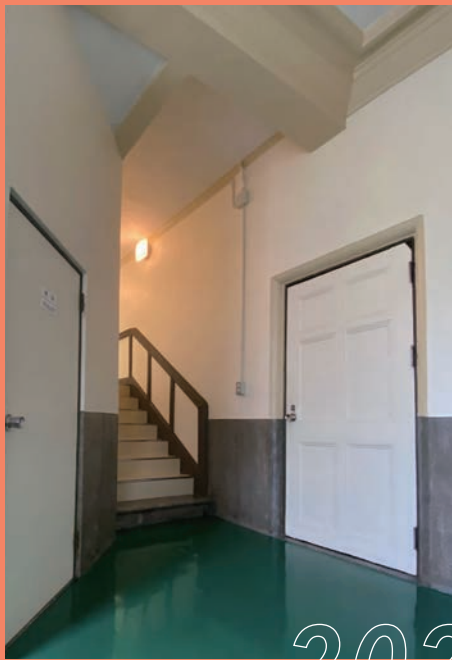
孤高の建築家とも呼ばれる白井晟一の代表作。全3期の工事に及んだ棟ごとに異なる造形と、そのミステリアスさは、今も全国から建築ファンが訪れるほど！

- 1918 親和銀行の前身「佐世保商業銀行設立」
- 1939 「親和銀行」誕生
- 1955 佐世保銀行との合併により「親和銀行」誕生
- 1967 第1期棟竣工
- 1969 第2期棟竣工
- 1975 第3期棟（懐霄館）竣工
- 2020 十八銀行との合併により「十八親和銀行」誕生

資料協力: 白井晟一研究所 株式会社十八親和銀行 株式会社青幻舎(白井晟一入門)

平瀬町の国際通り沿いに重厚な雰囲気とともに佇む「佐世保市民文化ホール(凱旋記念ホール)」は、第一次世界大戦(1914~1918)からの「凱旋」を「記念」する「館」として99年前に建設される。レンガと鉄筋コンクリートからなる左右対称の外観、幾何学的な装飾、建築様式は、デモクラシーに湧いた大正時代を偲ばせる。そしてこれは、佐世保市にとって初めての公会堂であり、それは旧日本海軍によってもたらされた。

大戦後半、佐世保鎮守府に所属していた艦艇を中心に編成された第二特務艦隊が同盟国イギリスからの求めに応じ、地中海にて潜水艦からの護衛作戦に参加する。彼らは、戦争の早期終結を導いたとも言われる活躍から「地中海の守



2022 / 2012 The Citizen Cultural Hall

凱旋記念ホール

日米を刻んだ市民のための文化ホール



護神」と称され、各国からの勳章を得るほどの名声を得た。

ことの顛末は、国内においても大きく報道され、その盛り上がりが鎮守府管内12県からの寄附による凱旋記念館建設へ繋がったとされる。集められた寄附、約8万6,000円(現在価値で11億円)が投じられ、竣工後、海軍へと寄贈されている。そのため、当時の主な用途は海軍の式典が中心であった。

しかし、建設からわずか15年ほどで勃発した第二次世界大戦(1939~1945)においては、その戦没者の合同葬等に利用されるという運命を辿ることとなる。敗戦後、駐留した米軍により接収された記念館は、その白い内観を真っ青に塗装されるなどの改修を経て、米兵向けの劇場、映画館、ダンスホールとして約30年間運用される。その間、記念館は「Show Boat」と呼ばれた。

新たに「佐世保市民文化ホール」の名を与えられ、記念館が名実ともに市民のものになったのは1982年。文化活動の練習、発表の場として必要な整備が行われたが、内装は米軍時代の名残を残したまま再スタートを切る。復原工事により、青い壁が創建当時の白に戻るの、その34年後、「日本遺産」として認定を受けた2016年を待つことになる。

約一世紀の間に、この街の歴史を刻み、その名、その姿、その役割を変えてきた(ある

いは変えられてきた)このケンチクの中で、響いたであろうさまざまな「声」たちを、今を生きる私は、私たちはどのように想像しようか。

佐世保市民文化ホール(凱旋記念ホール)
The Citizen Cultural Hall

設計者 不明

所在地 平瀬町2

竣工 1923年

第1次世界大戦の凱旋記念館として誕生し、第2次大戦後アメリカに接収され娯楽施設になり、現在は市民のための文化ホールに变身!

歴史 4

機能美 3

装飾美 4

変身力 6

規模 2

- 1923 「佐世保海軍凱旋記念館」竣工
- 1945 米軍により接収以降、劇場・映画館等として使用
- 1977 米軍から日本へ返還
- 1982 「佐世保市民文化ホール」として市に移管し開館
- 1997 国の登録有形文化財(建造物)となる
- 2005 第7回佐世保市景観デザイン賞
- 2016 改修(復原)工事完了
日本遺産に認定



1961-1969

地理院地図



2016

地理院地図

Huis Ten Bosch

理想と現実の狭間で続く千年の夢

ハウステンボス

中国から学び日本の古都となった京都を念頭に置き、自然と共生した土地づくりをオランダに、水が循環する環境づくりを江戸に学び、現代の最新技術を盛り込んだエコロジーとエコノミーの共存によって千年続く新時代の街を、大村湾を舞台につくりあげる。これが、ちょうど30年前、1992年3月に開業したハウステンボスが掲げた壮大なコンセプトだった。

このプロジェクトを理念と設計の面から支えた池田武邦は、太平洋戦争における3度の海上特攻を奇跡的に生き延び、1945年、21歳で佐世保に生還する。短い療養の中で、自らが身を投じた荒々しい海と真逆の、平和で波静かな大村湾が彼の目に日本の原風景として刻まれた。戦後、建築家となり日本初の超高層ビルの建設に携わるなど日本の復興に力を尽くす中で、大村湾との再会、ハウステンボス創業者となる神近義邦との出会いが彼を長崎オランダ村計画、のちのハウステンボスプロジェクトへと誘うことになる。

ハウステンボス用地となったのは、大村湾に隣接する針尾島にあったかつての軍用地で、造成後、長年放置され

巨大プロジェクトは、バブル景気の後押しもあり実現したものの、その崩壊とともに幾度となく経営危機に陥ることとなった。

奇しくも開業当時「土台を築くだけでも30年はかかるだろう」という予言めいた言葉を神近は残していた。その時を迎え、何度かの経営陣の交代、閉園の危機を乗り越え、開業当時から働くある社員は、「若木とともに自分を成長させてくれた、今なお変化を続けるこの街を愛している」と語る。あなたは、千年後のある日、この街にどんな「声」が響いて、ほしいと思うだろうか。



創業時のハウステンボス(1992年)

©ハウステンボス/J-20139

ケンチクの声 / Huis Ten Bosch

ハウステンボス

Huis Ten Bosch

設計者 池田武邦(日本設計)

所在地 ハウステンボス町1-1

竣工 1992年

©ハウステンボス/J-20139

千年の街づくりを標榜した大規模プロジェクト。徹底的にオランダを再現した街並みに対して、江戸や京都の思想が組み込まれてたって知ってた!?

歴史 1

機能美 3

芸術美 4

規模 5

未来度 6

- 1943 針尾海兵団、海軍兵学校発足(現在のHTB)
- 1977 元陸自針尾駐屯地、長崎県針尾工業団地へ
- 1983 HTBの前身となる「長崎オランダ村」開園(西彼町(現・西海市))
- 1992 「ハウステンボス(HTB)」開園
- 1999 水資源功績者賞
- 2003 会社更生法申請(新経営体制へ移行)
- 2005 リデュース・リユース・リサイクル推進協議会会長賞
- 2009 新工芸百選
- 2010 H・I・Sによる経営再建スタート
- 2019 開業以来初となる黒字化
- 2022 長崎県・佐世保市と九州・長崎一円候補地に関する基本合意
- 開園30周年



©ハウステンボス/J-20139

草も木も生えない荒地となっていた工業団地だった。オランダ村の成功を経て、神近と池田はこの地で自然を再生し、実際に人が住み続けられる街をつくることを決意する。

「ハウステンボス」はオランダ語で、「森の家」を意味する。大規模な土壌改良を行うとともに植林を行い、かの国の市街地の段階的發展をトレースした運河によるまちづくりと平行し、それを裏で支える水浄化システムなど最新技術を余すことなく導入し、2,500億円超を投じた